

## 赤ちゃん連れに優しい都市カンパラ

### 母子の大冒険

ウガンダへ行く。10ヶ月の息子、生まれて以来の大冒険だ。初めてウガンダを訪れてから9年が経ち渡航は7回を数える私も、子連れでの滞在は初めて。「こんなに小さいのに連れて行くの?」「病気にでもなったらどうするつもり?」周囲からは心配する声ばかりが聞こえた。当時、夫は仕事で首都カンパラに滞在していた。息子が生まれて初めての正月を家族3人一緒に迎えたいという気持ちも強かったし、近い未来の子連れフィールドワークに向けて、「息子とのウガンダ」を体験しておきたかった。

私と息子が暮らす富山を出発してから24時間。ビクトリア湖の脇、エンテベ空港に到着した時の息子の顔はなかなか面白かった。「一体俺はどこに連れてこられたんだ。」とでも言いたしそうな困惑した表情だ(写真①)。

ウガンダを訪れたのは2017年のクリスマス。真冬の富山は大雪に見舞われ、日の照らない寒く暗い毎日が続く。対して、ウガンダは乾季。赤道直下の太陽が照りつけ、ビクトリア湖を撫でる風が魚の匂いと湿気を運んでくる。五感の全てを働かせて、自分がこれまで暮らしていた場所との違い

を感じ取ったようだった。

カンパラ郊外にある友人宅。近所には野菜や鶏を売るローカルマーケットや日用品を揃える小さなスーパー。裏手にはスラムが広がり、バーからは大音量の音楽が夜中まで鳴り響く。ウガンダ人でさえも敬遠する地域に立つ一軒家が、今回の滞在先だ。



写真①エンテベ空港で父親に抱っこされながら困惑した表情を見せる息子。

一歩外に出れば目に飛び込んでくるものが新しい(写真②)。ベビーカーもでこぼこの穴だらけの道を走る。コンクリートで舗装された道しか知らない息子にとっては、伝わる振動でさえも新しかっただろう。そして、私にとっても新発見の連続だった。9年目のウガンダには、これまでとは全く違う景色が広がっていた。



写真②滞在初日にローカルマーケットにて

## おっぱいとオムツ

ウガンダの人口増加率は世界でもトップクラス。とにかく子どもが多い国だ。小さな子どもですら、弟妹の面倒を見ているおかげか、赤ちゃんの抱っこ仕方を知っている。息子を連れて家を一步出れば、道を歩いている子どもたちが「ベイビー、ベイビー」と寄ってくる。日本ではなかなか見られない光景だ。

カンバラは想像以上に赤ちゃん連れに優しい。それは、授乳室が町のいたるところにあるとか、オムツ替えがスムーズにできるようトイレの設備が整っているとか、そういうことではない。むしろその逆で、3週間のカンバラ滞在中、授乳室もオムツ替え台も一度も目にすることがなかった。では、いつどこでおっぱいをやってどのようにオムツを替えるのか？答えは「いつでもどこで

も好きなように」だ。

ウガンダの母親たちを見ていると、いつでもどこでも臆することなくおっぱいを出し、授乳している。仕事中や乗り合いバスに乗車中、周りに誰がいようとお構いなしで赤ちゃんに食事を与えている。外出する際は、授乳シーンが人目につかないよう赤ちゃんごと覆う授乳ケープを必ず携帯する私も、今回の滞在中にケープを使ったのは初日だけ。「ちょっと恥ずかしい」という感覚を捨て、ウガンダの母親たちに倣い、人前でもケープを使わずに授乳してみた。これがとても良かった。息子をケープで覆うと、まず暑いので嫌がるのだが、ケープなしだとごくごくおっぱいを飲んでくれる。私にとってもケープを装着する手間がかからず、おっぱいを飲む息子の顔を愛おしく眺めながら、なんとも言えない解放感を味わった。そして私はケープを使わずに外で授乳することを「オープン授乳」と名付け、カンバラ滞在中は「オープン授乳」を心から楽しんだ。

また、外国人観光客も多く訪れるビクトリア湖脇のレストランへ行った時のこと。数日間便秘だった息子が、大人たちが食事をしている最中に大量のウンチを出した。息子も気持ちが悪くて泣くし、今すぐにでも替えないとウンチがオムツから漏れ出してしまうという大惨事一步手前。10ヶ月の息子はまだ自立できず、オムツ替えには寝かせる必要がある。新しくできたショッピングモールの中だったので、もしかしたらトイレにオムツ替え

台があるかもしれないと見に行くも、やはりない。どこでオムツを替えようかとオムツとお尻ふき片手に困っていたら、店員が近づいてきてくれた。そして一言、「ここで替えたらいいいじゃないか。」と店内の長椅子を指差した。

私たち夫婦は困惑した。ここはレストラン。近くのテーブルには食事の客が大勢いる中、臭いを放つ息子のウンチオムツを替えて本当にいいのだろうか…。そんな困惑をよそに店員は客のオーダーを取るために去っていく。そして、私たちはその場でオムツを替えることにした。周りの目が心配だったが、客は皆各々の食事を楽しんでおり、オムツを替えている私たちのことを気にしている人は1人もいないようだった。

無事オムツを替え終わり、息子もすっきりとした表情を見せる。そこでまた驚いたことがあった。オムツをビニール袋に入れ、バッグにしまおうとしていると今度は別の店員が近づいてきて、「私が捨てておいてあげるわよ。」と言うのだ。オムツを片手に息子に微笑みかけてくれる店員に、驚きとともに “Thank you.” と伝えた。

## 日本とウガンダの子育て事情

カンパラ滞在中、レストラン内でオムツを替えたのは一度や二度ではない。一度は、テラス席のテーブルの上で替えた。それも店員が「ここでどうぞ。」と声をかけてくれたのだ。衛生面やマナ

ーなど、確かに気になることはある。しかし、オープン授乳にしてもオムツ替えにしても、カンパラで外出すると「赤ちゃん第一」なのがよく分かる。

日本のように設備が整っていることは、それはそれで素晴らしいと思う。自由に使える町中の授乳室や、当たり前のようにトイレに設置されているオムツ替え台は、とても便利で清潔。私も何度利用したことだろう。しかし、設備が整っている分、「おっぱいをあげたければ授乳室へ。」「オムツを替えたければトイレへ。」と、赤ちゃんの大切なアクティビティであるおっぱいと排泄は、どうしても人目から遠ざけられる。設備が整い個室を使うことが当たり前となりつつある社会だからこそ、レストランで授乳をしていれば「トイレにでも行けばいいのに。」と別の客に囁かれたり、電車内で赤ちゃんのウンチの臭いが漏れようものなら顔をしかめられたりするのだろう。

一方ウガンダでは、赤ちゃんへの授乳と排泄は、それぞれが「当たり前」として受け入れられている。赤ちゃんはいつだっておっぱいを飲みたいし、1日に何度も排泄する。言葉が喋れないため、それらの欲求を泣いて訴える。それを嫌な顔をするどころか、手伝おうと近づいてきてくれる。日本で赤ちゃんを連れて外出すると気を使うことが多く、「すみません。」と何度も口にすることに慣れている自分がある。カンパラで息子が大きな声で泣いていることを理由に “Sorry.”

“Excuse us.” とただの一度でも口にしたらどうか。「ランチ 赤ちゃん連れ」と、赤ちゃん連れに優しいレストランを検索する必要もない。赤ちゃんはそこにいて当たり前で、町行く人はいつだって優しい。

ウガンダで子育てをしている日本人の友人たちは、口を揃えて「子育てしやすい。」と言う。核家族での子育てが主流となり、「ワンオペ育児」という言葉さえ生まれる日本とは違い、町行く人たちの優しさからも見て取れるように、子どもはみんなで育てるものという意識が根底にあるのだろう。

### おせっかいおばちゃんたち

出会った頃は 20 代だったウガンダの友人たちももう 30 代半ば。私も含めもう立派なおばちゃんだ。友人たちにはもう何人も子どもがいて、ウガンダを訪れるたびに「産んでないのはワキコだけだ。」と言われ続けてきた。私が赤ちゃんを連れてウガンダに来ることを心待ちにしていた友人たちは、待ち合わせ場所で私と息子を見つけるとなり「キャーッ！」と奇声をあげながらものすごい勢いで駆け寄ってくる。その勢いに圧倒され、また、体格の大きい友人の赤ちゃんたちにももみくちゃにされ、最初の 1 週間、息子は泣いてばかりいた。

泣いてばかりの息子を世話する私を前に、友人

たちはおせっかいおばちゃんへと変貌する。授乳の仕方から寝かせ方まで、矢継ぎ早にウガンダの常識を伝えてくるのだ。勢いよく次々と飛んでくる言葉たちには正直辟易することもある。「好きにさせてよ！」と叫びたくなることもたまにはあった。それでも勢いのある言葉とは裏腹に、彼女たちの優しさは、もっと深いところでじわじわと伝わってくる。

そして、赤ちゃんを大切に想うその気持ちは息子にも伝わるのだろう。友人たちの、大きくなった友人の子どもたちの、そして見知らぬ人たちの抱っこに徐々に慣れていく息子。表情に変化が表れ、徐々に笑顔を見せるようになった。

### まだ見ぬウガンダへ

たった 10 ヶ月の息子をウガンダへ連れて行くことに、私だって不安がなかったわけではない。滞在序盤、目に飛び込んでくるもの全てが新しく、大きな瞳をキョロキョロと動かしていた息子。好奇心よりも不安が色濃く表れていたその瞳を見て、3 週間の滞在は息子にとって長かったかなとさえ感じた。そんな不安はよそに、ウガンダ人から注ぎ込まれるたっぷりの愛情を受け、息子はぐんぐんと成長した。滞りの終盤で見せるようになったキラキラの笑顔は、私たち夫婦にとって宝物となった（写真③）。

そして、息子の成長を通して、何度も訪れてい

るウガンダの新たな魅力に気がつくことができた。「赤ちゃん第一」のお出かけ事情も、ウガンダの母親たちのおせっかいとも言える愛情表現も、その一つだ。

1年の産休・育休を経て、2018年4月より復学した。博士論文執筆に向けて、これからウガンダでのフィールドワークを重ねていくことになる。初めてウガンダを訪れた時は10ヶ月だった息子も、今や1歳半を迎える。そこら中を走り回るようになった息子は、今度は私に何を気づかせてくれるのだろうか、次回のウガンダ滞在を今から心待ちにしている自分がある。

大平和希子（おおひらわきこ）



写真③友人に抱っこされ笑顔を見せる息子